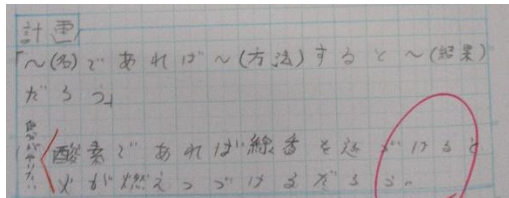


第6学年1組 理科 水溶液の性質

学習活動・予想される児童の反応	本時見られた深く学び続ける子どもの姿								
1 前時を振り返り、炭酸水から出た泡は何か調べるといふ 本時学習の見通しをもつ。 炭酸水には何がとけているのだろう。 	○ 「もし～（溶けている物の名前）であれば～（方法）すると～（結果）だろう」という前時に立てた仮説を振り返ることで、自分で考えた方法で実験していこうという意欲を高める姿が見られた。 								
2 試験官に泡を集め、見出した方法で溶けているものが何かを知るための実験をする。 試験官に泡を集め、自分が選んだ方法で調べる。 <table><tr><td>(A) 火のついた線香を入れる。</td><td>(B) 石灰水を入れてふる。</td><td>(C) 気体検知管で酸素の割合を調べる。</td><td>(D) 気体検知管で二酸化炭素の割合を調べる。</td></tr></table>	(A) 火のついた線香を入れる。	(B) 石灰水を入れてふる。	(C) 気体検知管で酸素の割合を調べる。	(D) 気体検知管で二酸化炭素の割合を調べる。	【資料1 前時に立てた仮説 子どものノート】				
(A) 火のついた線香を入れる。	(B) 石灰水を入れてふる。	(C) 気体検知管で酸素の割合を調べる。	(D) 気体検知管で二酸化炭素の割合を調べる。						
3 実験の結果を交流し、炭酸水に溶けているものを見出す。 <table><tr><td>(A) 線香の火は大きくならず、すぐに消えた</td><td>(B) 石灰水が白くにごった。</td><td>(C) 空気中の酸素の割合と変わらない。</td><td>(D) 空気中の二酸化炭素より二酸化炭素が多い。</td></tr><tr><td>酸素ではない。</td><td>二酸化炭素だ。</td><td>酸素ではない。</td><td>二酸化炭素だ。</td></tr></table> 炭酸水にとけているのは二酸化炭素。 水よう液には気体をとけているものがある。	(A) 線香の火は大きくならず、すぐに消えた	(B) 石灰水が白くにごった。	(C) 空気中の酸素の割合と変わらない。	(D) 空気中の二酸化炭素より二酸化炭素が多い。	酸素ではない。	二酸化炭素だ。	酸素ではない。	二酸化炭素だ。	○ 4つの実験方法から出た結果をもとに考察する場面を設定したことで、多面的に考え、複数の結果を基にどのようなことが言えるかを考察する姿が見られた。 ○ 既習の学習をもとに、自分で選んだ方法で実験する場面を設定したことで、気体検知管の使い方を理解できていなかったことを振り返り、次は気体検知管の使い方を調べておきたい、と実験方法を見直し、自分の実験の仕方に課題を見出す姿が見られた。また、線香の火を泡を集めた試験官に入れる方法で上手く実験できたので、次はこの方法で他の水溶液も何が溶けているか実験してみたい、と意欲を高める姿も見られた。
(A) 線香の火は大きくならず、すぐに消えた	(B) 石灰水が白くにごった。	(C) 空気中の酸素の割合と変わらない。	(D) 空気中の二酸化炭素より二酸化炭素が多い。						
酸素ではない。	二酸化炭素だ。	酸素ではない。	二酸化炭素だ。						
4 学習を振り返る。 炭酸水を熱すると何も残らないのは、とけていた二酸化炭素が空気中にでていくためということがわかった。予想通り炭酸水から出た泡を試験管に入れ、石灰水を入れてふると白く濁った。次は、塩酸やアンモニア水にとけているものを調べてみたい。									

○ 炭酸水に何が溶けているかを予想し、既習の学習方法を基に自分が考えた方法で実験し、確かめるといふ自己調整学習を仕組んだことで、主体的に学ぼうとする子どもの姿が見られた。

● つかむ段階で、炭酸水には何が溶けているのか調べたい、どうしたら調べられるのか？という子どもの目的意識を高めることができなかった。子どもの意識、考えに応じた導入が必要だった。